

177 GnRH analogによる子宮内膜腺細胞
像の変化
-増殖能と糖鎖抗原の発現について-

関西医大

岡田英孝、梅寄圭吾、越川園子、安田勝彦、
中島徳郎、神崎秀陽

【目的】GnRH analog (GnRHa)使用例の内膜組織について萎縮像が報告されているが、その萎縮を客観的にとらえるためにArgyophilic nucleolar organizer regions (AgNORs)とLe^y抗原の発現について検討した。

【方法】GnRHa使用10例(1~4カ月)、未使用例(増殖期5例、分泌期3例、閉経期5例)を対象とした。AgNORsの客観的評価の手段として、Image Processor for Analytical Pathology(IPAP)にて画像解析を行った。Le^y抗原の評価として、一次抗体にBM-1/JIMRO(Le^y)抗体を用い、streptavidin biotin法にて検討した。

【成績】子宮内膜細胞におけるNORs数核の変化は、GnRHa使用例 1.98 ± 0.32 、増殖期 2.29 ± 0.31 、分泌期 3.71 ± 0.04 、閉経期 1.10 ± 0.11 であった。また、NORs面積/核の変化は、GnRHa使用例 2.13 ± 0.77 、増殖期 3.60 ± 0.63 、分泌期 4.52 ± 0.95 、閉経期 0.41 ± 0.07 であった。このように、増殖期、分泌期に比べてGnRHa使用例、閉経期で、NORs数/核とNORs面積/核は、有意に低下を示した。Le^y抗原の発現は、GnRHa使用例と閉経期はcytoplasmに強く認められたのに対し増殖期と分泌期ではapicalにごく弱い反応が見られた。

【結論】1)萎縮像を、AgNORs染色と画像解析装置を用いる事により、客観的に評価できること。

2) NORsの判定に数もさることながら面積も有用なこと。

3) Le^y抗原の発現は、萎縮に関連すること。

以上が示唆された。

178 悪性子宮ミューラー管混合腫瘍
(MMMT)の免疫組織学的検討とヌードマウス同所移植実験に基づく組織発生についての考察

済生会病院, 福井医大*

黒川哲司, 吉田好雄*, 佐々木博正*, 川上由香*,
竹内 譲*, 紙谷尚之*, 富永敏朗*

【目的】混合腫瘍の組織発生に対する3つの仮説(Collision theory, Composition theory, Combination theory)を急激に不幸な転帰をたどった MMT 患者の原発巣と転移巣,そしてヌードマウス同所移植実験における病理組織学的な立場から考察する。

【症例】50歳(5G4P)1995年3月 MMT の診断で子宮全摘をうけCAP療法をうけた。7月加療中、椎体転移を生じ椎弓・腫瘍摘除術をうけたがその後、腹腔内にも再発し死亡した。【材料,方法】患者,家族の同意を得て子宮全摘時の原発腫瘍および転移巣の病理組織学的,免疫組織学的(Vimentin, Desmin, EMA)検討を実施した。また原発腫瘍組織を細切し5週齢ヌードマウスの utero-cervical junction に同所移植を行い,形成された腫瘍部分の病理学的,免疫組織学的検討を実施した。【結果】原発腫瘍は癌腫成分と肉腫成分およびどちらもいえない未分化な成分より成り立っていた。未分化な部分はVimentin, Desmin, EMA に陽性であった。転移巣は非常に未分化な成分より成立していたがVimentin, Desmin, EMA は陽性であった。未分化な成分よりなる組織の同所移植実験群では移植後5週目には腫瘍を形成した。原発腫瘍成分と同様,癌腫成分と肉腫成分および未分化な成分より成り立ちその部分はVimentin, Desmin, EMA, に陽性であった。

【結論】MMMTの組織発生は癌と肉腫に分化しうるbi-potentialな細胞より発生すると思われた。この結果は,Combination theoryを支持するものである。